

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00371

研究課題名(和文) 移動と地政学—「イギリス/英語」小説に見る地理学的想像力

研究課題名(英文) Geographical Imagination in English Novels--Migration and Geopolitics

研究代表者

服部 典之 (Hattori, Noriyuki)

関西外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：50172937

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)： 英文論文'Abyssinian Johnson'がバクネル出版局から論文集『Johnson in Japan』として掲載された。また、本研究課題に関するシンポジウムを日本英文学会全国大会などで行い、地理学的想像力がイギリス小説の根幹にあることを学会に示すことができた。具体的にはシンポジウム「冒険の残滓—『ロビンソン・クルーソー』から300年とシンポジウム「<ポスト><ウイズ>コロナ時代の英語英米文学研究—デジタル・ヒューマニティーズに向けて」であり、論文の形で纏めた。冒険小説の古典である『ロビンソン・クルーソー』の再評価により、地理学的想像力に基づいて英文学史の見直しを提唱した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英国小説の研究とは、人類の歴史で極めて重要な地理学的想像力とグローバルな地政学的思考や価値観の共有と衝突が、イギリス小説の解読にあたって重要であることを示せた。世界中の様々な国同士の関係性がイギリス小説の冒険小説や旅行文学において、視野に入れるべき問題であり、それを示すべく、学会のシンポジウムで数々のプロポーザルを行った。また、現代社会を揺るがせている疫病や戦争は、このテーマで考えるとき、すでに英国小説の中に様々な洞察を見いだすことができたことを主張し、文学が決して過去の遺物ではなく、現代社会の問題への解決策への可能性を提示していることを訴えた点で、社会的意義は大きかったと考えるものである。

研究成果の概要(英文)： My article 'Abyssinian Johnson' was accepted by Bucknell University Press and published with others entitled '_Johnson in Japan_'. I took part in some academic symposium and proposed that the geographical imagination and Geopolitics are essential in discussing the development of English Novels. For example, I proposed the reevaluation of '_Robinson Crusoe_' and the reinterpretation of the particular novel leads us to reconsider the lineage of Adventure Novels.

研究分野： 英文学

キーワード： 地理学的想像力 イギリス文学 ダニエル・デフォー 疫病文学 戦争文学

1. 研究開始当初の背景

18 世紀イギリス文学研究の最先端の位置を占める学会の ASECS(American Society of Eighteenth Century Studies)の先々代会長 Aravamudan の主著が *Enlightenment of Orientalism*(2012)であり、前会長の Kathleen Wilson の主著が *The Island Race: Englishness, Empire and Gender in the Eighteenth Century*(2003)であることが示すように、18 世紀研究の主要な関心の一つがアジアや南太平洋(南海)島嶼地域にあり、18 世紀イギリスの地図では空白であった地域と始めた交易・葛藤の意味の解明が重要課題であることは間違いがない。西洋史の分野でも同じ現象が見られ、例えば J.G.A.Pocock の *The Discovery of Islands*(2005)が当該学会で大きな話題となり、邦訳も出されたことが示すように、様々な学問分野で、アジア・南海とイギリスのファースト・エンカウンターがその後のグローバルな世界の動きを加速させた認識論的転回であったという考えが共有されている。

18 世紀イギリスにとっての「空白地点」への関わり方は、学界の最近の最も大きな「問い」となっている。たとえば、大航海に乗り出した船員と南海の女性との「不名誉な交易」(= 性的関係)を実態研究と併せてメタフォリカルな民族間の関わりの問題として取り上げた Laura Rosenthal の *Infamous Commerce: Prostitution in Eighteenth Century British Literature and Culture*(2006)、クック船長やスティーヴンソンやジャック・ロンドンと南海との実際の関係の考察から南海表象のあり方を探った Rod Edmond の *Representing the South Pacific: Colonial Discourse from Cook to Gauguin*(1997)など、枚挙に遑ない。

イギリスからのアジアなどへのまなざしが学界の話題になってから数年経ち、今は一方的な西洋の視線だけではなく、アジアからのまなざし返しをも射程に置いたよりグローバルな研究がなされるようになった(一例が Pocock の「対蹠点」という概念)。その最近の例が申請者もパネリストで加わった 2016 年の ASECS 学会の年次大会で行われたシンポジウム“Oriental Networks: Culture, Commerce and Communication, 1662-1842”である。イギリスを含む西洋と日本を含むアジア・南太平洋の交易・衝突の様を包括的なネットワークとコミュニケーションという双方向的に捉え直す試みであった。本研究の目的は単なる「旅行文学研究」ではなく複数地域間の双方向的地理学をどう描き直すことができるかを「問う」ものであった。

2. 研究の目的

従来のイギリス文学研究で、旅行文学は一方的なイギリス人の世界への進出のありようの分析として研究されてきた。本研究では、ヨーロッパ人たちの旅行を旅行先の現地人の反応をも含んだ複層的な交易・交流として捉え直し、現地人のあり方をも取り込んだイギリス文学におけるイギリス人の地理学的想像力を研究することを目的とした。例えばアンボイナ事件(1623 年)に関しては、ドライデンが『アンボイナ』という劇を、デフォーが『キャプテン・シングルトン』という小説を上梓しているが、この二作品で描かれているのはイギリス人だけではなく、オランダ人、日本人などである。香辛料交易における競争・闘争をも視野に入れた交流・葛藤の様を実際の文献にも目を通した上で、日本人の視野も含めて文学作品の再読を試みなければ、単なる美学的分析に終わってしまう。本研究は包括的かつ双

方向的な旅と衝突のあり方を考察し、改めて各時代のグローバルな関係性を記述しようとする点で創造性を持つ。なお、本研究ではイギリスから見て東のアジアのみならず、西のカリブ海、南のアフリカ、北のスコットランドなど、全世界的にイギリス小説が描いた旅行が惹起したグローバルな衝突やコミュニケーションを包括的に研究するところにも独自性がある。書物としてもまとめる予定で、このような視点での広範な研究は試みられなかった点を考慮すると、新たな視座を持つ創造的研究である本課題が英文学のみならず世界史や文化研究の分野に資すること大であるとの考えのもとで目的を設定した。

3. 研究の方法

1. 前述の国際学会 ASECS は毎年開催されており、平成 30 年度はオランダ、平成 31 年度はデンヴァー、平成 32 年度はセント・ルイスで開催されることが決定している。アメリカでの研究協力者である、ペンシルヴァニア大学の John Richetti 教授、David Espey 教授、またバックネル大学の Greg Clingham 教授と協力して本課題に関するシンポジウムを開き、最先端の学者と本研究課題について議論を行い、問いの解明を試みた。2. ASECS の上位学会である国際 18 世紀学会 (ISECS) は 4 年に一度開催され、前回 2015 年にロッテルダムで開催された際は、申請者も参加し議論に加わった。次回の 2019 年 (平成 31 年) にはエジンバラ大学で開催されることが決まっており、ここでも ASECS での研究を総括するシンポジウムを提案し、世界的な議論を展開した。3. 日本英文学会第 91 回大会が平成 30 年 5 月に開催されることが決まっており、ここで申請者はシンポジウム「Local/Regional と National の交渉」(仮題)の講師を務めることが決まっていた。国家と地域の交渉の問題はメトニミカルに本研究課題のイギリスとアジアなどの地政学に繋がるテーマであり、申請者はこの点を念頭に置いて議論に参加する予定である。4. 申請者は Bucknell University Press で *Johnson in Japan* という書物を編纂中であり、本研究課題にかかる次の書物として、*Geographical Imagination in English Novels* を提案し出版する予定である (上梓された)。

4. 研究成果

2018 年

最大の実績は日本を代表する英文学の学会である日本英文学会第 90 回全国大会のシンポジウム第 3 部門「ナショナルなもの(再)想像—スコットランド、アイルランド、ウェールズ、イングランドの 300 年」でスコットランドを代表して講師を務めたことである。服部は「ユニオンの行方—James Hogg の解体していく罪人」というタイトルで発表を行い、シンポジウムの議論に参加した。James Hogg という一見極めてリージョナルな作家の中にも「地理学的想像力」は極めて大きな力が働いており、イングランドを対局に見据えながら、イングランド・スコットランド合同(1707)という歴史的事実に直接触れないにもかかわらず、「移動と地政学」のせめぎ合いがこの小説の中核を成している事実を指摘した。

2019 年

前年に行ったシンポジウムに基づき、論文にした。「待兼山論叢」第 52 巻に発表した「ユニオンの行方—ジェイムズ・ホッグの解体していく罪人」は口頭発表を基に加筆・訂正を行ったものである。

2019年12月8日に開催された日本英文学会関西支部大会第14回大会(於:奈良女子大学)で行ったシンポジウム「冒険の残滓――『ロビンソン・クルーソー』から300年」において発表した内容を論文として発表した。『ロビンソン・クルーソー』出版から300周年を記念した本シンポジウムの趣旨に則り、地理学的想像力の源泉とも言える本作をイギリスとカリブ海を巡る「対蹠地」という概念で再解釈した。

2020年

本科研課題のテーマとして冒険小説の系譜の再考を措定しているが、冒険小説に乗り出す起点としてのイングランドという国とはいかなる存在であるかを考察したダニエル・デフォーの長詩の翻訳を名城大学の西山徹教授と京都大学教授の高谷修教授と龍谷大学教授の福山宰教授とともにを行い、出版した。音羽書房鶴見書店から書物『生粋のイギリス人』を上梓した。

2021年

本研究課題に関する英文論文'Abyssinian Johnson'がバックネル出版局から論文集『Johnson in Japan』として厳しい査読の上掲載された。エチオピア(アビシニア)を舞台としたジョンソンの小説 Rasselas を地理学的想像力の観点から分析したものである。

2022年

2019年12月8日に開催された日本英文学会関西支部大会第14回大会(於:奈良女子大学)で行ったシンポジウム「冒険の残滓――『ロビンソン・クルーソー』から300年」において発表した内容を論文として発表した。2022年7月16日に開拓社から発行された書物『十八世紀イギリス文学研究[7号]――変貌する言語・文化・世界』の巻頭論文「浜辺の想念――クルーソーの垂直的冒険」(pp.2-23)である。本書は査読がある論集なので、投稿した後、編集者との数回にわたる議論の結果、採用され、上梓されたものである。『ロビンソン・クルーソー』出版から300周年を記念したシンポジウムの趣旨に則り、地理学的想像力の源泉とも言える本作をイギリスとカリブ海を巡る「対蹠地」という概念で再解釈した。

また、第94回日本英文学会(2022年5月22日、オンライン大会)で行った特別シンポジウムである「<ポスト><ウィズ>コロナ時代の英語英米文学研究――デジタル・ヒューマニティーズに向けて」の司会を服部が務めた。服部の口頭発表のタイトルは「'Plague was not in London alone, it was every where'――「疫病(戦争)文学」と<ポスト><ウィズ>コロナ時代」である。

2023年

2022年度のシンポジウムに基づき、学2023年1月20日発行の学会誌『英文学研究 支部統合号』(第15巻)に論文を掲載した(特別寄稿論文 招待論文)。「'Plague was not in London alone, it was every where'――「疫病(戦争)文学」と<ポスト><ウィズ>コロナ時代」(pp.153-160)である。本論文で扱った文学作品は、どれも地理学的想像力にまつわるものであり、移動が物語の中核に見られることを、疫病や戦争と関連付けて論じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 服部典之	4. 巻 52
2. 論文標題 ユニオンの行方 ジェイムズ・ホッグの解体していく罪人	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 待兼山論叢	6. 最初と最後の頁 1, 16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 服部典之
2. 発表標題 「浜辺の想念 クルソーの垂直的冒険」
3. 学会等名 日本英文学会関西支部第14回全国大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 服部典之
2. 発表標題 ユニオンの行方 James Hoggの解体していく罪人
3. 学会等名 日本英文学会第90回全国大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Noriyuki Hattori	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Bucknell University Press	5. 総ページ数 191
3. 書名 Johnson in Japan	

1. 著者名 服部典之、西山徹、高谷修、福本宰之	4. 発行年 2020年
2. 出版社 鶴見音羽書房	5. 総ページ数 190
3. 書名 ダニエル・デフォー 『生粋のイングランド人』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------